

山折哲雄著「こころの作法」中央公論新社、中公新書 2002年9月25日刊を読む

夕焼けの信仰

1. 山田洋次さんにお目にかかったときだった。「男はつらいよ」シリーズの話になった。あの映画は、「寅さん」を主人公に 50 数本作りましたが、そのぜんぶに「夕焼け空」の場面を入れました、といわれた。
2. それをきいて私は驚いた。そのシーンのいくつかは覚えていたが、シリーズ全部に「夕焼け空」が登場してくるとは思ってもいなかったからである。ちょうど渥美清さんが亡くなった直後のことで、もうそれもかなわなくなったとあって、山田さんは肩を落とされた。私がお話にきき耳を立てたのはねじつは夕焼けにまつわる忘れがたい思い出があったからである。
3. もう十数年も前のことになるが、東京である国際会議に参加し、韓国からこられた仏教学者の李箕永さんにお話をうかがう機会があった。李さんはパーティーの席上で、「私は日本人がうらやましい。なぜなら日本人の多くが仏教というものをこころから受け入れているからです」といわれた。思わず、わが耳を疑いたくなるような気分になった。というのも当時の私は、日本人の大部分は無神論に傾き、無宗教民族であると思っていたからである。そのことを率直に口にするに、李さんはにっこり微笑んでいった。あなた方は「夕焼小焼」という童謡をよくうたうでしょう、あの歌には仏教の本質のすべてがうたいこまれているのではないのでしょうか……。
4. 虚をつかれるとはこのことだった。一瞬沈黙し、その歌の文句を反芻したとき、ひょっとするとそうかもしれないと思えてきた。しかしそんなことをいった人はどこにもいなかったし、文字に書かれたこともなかったのではないか。
5. 夕焼小焼で日が暮れて
山のお寺の鐘がなる
お手々つないで皆かえろ
烏と一緒に帰りましょう
6. あらためてうたってみて、なるほどそうだ、と思わないわけにはいなくなった。つくられたのが大正の大震災(1923年)のころ、作詞が中村雨紅で、作曲は当時東京音楽学校の教授だった草川信である。中村雨紅は八王子の神社に生まれ、女学校の先生になった。野口雨情などとともに活躍した童謡作家である。
7. 一行目に「夕焼小焼で日が暮れて」とあるが、夕焼け空をみて感動する人は多い。その経験を語る時の表情の輝きもまた格別である。それだけではない。古来、落日をうたった歌が多いことにも気づく。夕日にむかって敬虔な祈りを捧げる詩人たちの言葉もたくさんのこされている。絵の世界でもそうだったのではないか。多くの絵描きたちがそれこそ平成時代いらい、夕景のなかにある富士山の千変万化はもちろん、山や海のかなたに沈む太陽や夕映えの光景を描きつづけ

てきた。

8. その伝統が明治の新時代になってもつづいていた。学校唱歌や童謡にうたいつがれ、流行歌のなかにまで顔をのぞかせるようになった。それらのなかでもとくに忘れがたいのが、三木露風^{みきろふう}作詞、山田耕筰^{やまだこうさく}作曲の「赤とんぼ」ではないだろうか。さきの「夕焼小焼」とほぼ同時期につくられている。

9. 夕焼小焼の赤とんぼ 負われて見たのはいつの日か

10. この「夕焼け」をうたった二つの歌の誕生とともに、われわれの時代はあの 15 年戦争の暗い谷間に入っていった。その苦難の時期を、われわれはこの夕焼けの歌を唇にのせることでみずからを慰め、未来に期待をつないできたような気がする。

11. それにしても、なぜ夕日なのだろう。どうして落日にこころを動かされるのだろうか。いろいろなことが考えられるが、やはり根本のところは、われわれの先祖たちがその夕日のかなたに「浄土」をイメージしてきたからではないかと思う。この世を去って新しく生まれ変わる理想国土のイメージが、落日とその荘厳な輝きに託されていたからではないだろうか。

12. 夕日信仰はひよっとすると、日本人における文化的遺伝子だったかもしれない。

<コメント>

宗教学者の山折哲雄先生による「夕焼けの信仰」のコラム。「心の風景」の大切さを再認識させられる。この文の前にある「子守歌」についてのコラムも是非、御一読を

2019年2月20日(水)林明夫